

幼児期にふさわしい知的発達を促す教育を行うための

教育課程の研究

Research on infant education curriculum for intellectual development

幼年発達コース 田村隆太郎

はじめに

幼児が周囲の環境や友達と直接かかわる中で、好奇心や探究心を抱き物事の法則性に気づいたり文字や数量に対する感覚を磨きその記号的意味に気づいたりするなど、幼児期にふさわしい知的発達を促す教育を行う必要がある。このため、幼児期にふさわしい知的発達を促す教育の教育課程への位置づけについて研究する。

問題解決のための研究方法

本研究は、呉市白鳩幼稚園での実践事例の分析から、教師の指導と幼児の科学探究欲求との関連を考察する。

当園は、園からバスで3分くらいの位置に自然に接し、「自然から科学する心を培う」目的で設備した研修場がある。その場を利用してさまざまな自然体験活動ができる。例えば、ザリガニ、カブト虫、メダカなどの生き物とのふれあいの他に風車、ソーラーなどのエネルギー 自然に関する活動も行うことができる。

今回これらの中から、かぶと虫や植物を題材として幼児の探究心を駆り立てる指導について考察する。

指導事例1 石の下に何がいるかな？

1 本日のねらいと内容

ねらい

自然を満喫し四季の事象知ると共ににどんな生き物に出会うか観察しよう
土の中に住む生き物 石の下に何がいるか見てみよう。

内容

自分の遊びや行動を繰り返し遊べるように自由に遊ばせその中から数量 形などに気づかせよう。

本日の指導に当って

環境構成

ビニール袋 ほうき くわ 網 虫かごなど前日までの幼児の遊びや様子や動きから予想して用意する。

石の下に何がいるかな？

日案

木津 新富

8 : 3 0	登園	
生活の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達や先生と朝のあいさつをする。 ・ 持ち物の始末をするシールを貼る。 ・ 虫観察の用意する。 	
時間	環境の構成と予想される幼児の活動及び教師の援助	
9 : 3 0	園庭集合	用便をすませてあつまる。
9 : 3 5	人数を数ぞえる	呼ばれた人はハイと返事をする。
9 : 4 0	園バスにて出発	持ち物ビニール袋、かご、網など用意。
9 : 4 5	野外研修場到着	
9 : 5 0	観察	石の下 土の中 野原に住む生き物を見つける。
1 1 : 3 0	終了	
1 1 : 3 5	後始末	励ましながら最後までかたづけるように促す。
1 1 : 4 0	点呼	
1 1 : 4 5	帰園	後ろから人を押さない。 乗る順番を待つ 決められた席に座る。
1 1 : 5 0	手洗い 昼食準備	うがい 用便

2 . 授業の記録

草を引き抜いたところ予想外に長い草の根に驚いた、教師自体予想していなかったものを子供が教師のところに持ち込んだのである。日案にも指導計画の狙いにもない全くのハプニングであったが「みんな見てみてほらこんなに草の根が長いんじゃねー」「ケント君の腕と比べてみよう ほら同じ位長い」教師としてはこの瞬間を逃さず数 長さ 形の教育 探究心 好奇心を教育的に方向付けるべきだと判断した。「みんな聞いてよく聞いて」「ここは大切なんよ」と意気込んだが子供たちはあまり反応しなかった。「ミミズジャー」「怖い」「気持ち悪い」「大ミミズジャー」仕方なく教師は次々展開する場面でこどもたちが発見し「先生みてー」ともちこんでくるものに「めずらしいものを見つけたねー」と対応し

た。こどもたちは先生が見てくれるので次々といろいろなものを発見して先生に見てもらいたいばかりで夢中になってしまった。「今度はカブトムシの幼虫をさがそうね」と来週に期待をつないだ。そのあとは「山に言って遊ぼう」教師を先頭の木立のなかにあるターザンロープなどで遊んだで帰った。



3 . 考察

これを教えてやろう とか 将来これは役立つが教えようとする幼児の発達段階にあわないものにはあまり役立たないことが多い。草の根を子供の腕と比べて長さという数の観念を教えようとしたことは正しいと思われるが子供の反応は今ひとつピタリとこなく先生の言葉とか熱意入れ込みにたいしてまるでそっちのけで虫やミミズに集中しているのである。子供の腕と比べてその長さを知らせようとした先生の感性はすぐれているがそれならどうしてこどもの反応を見てとっさに矛先を変える技術に気づかなかったか惜まれる。教師としては常にうまく子供を乗せて今日自分の教えたいこと狙い目的を達成したいものだ。その後は木立の中で遊びに入るがその前になぜ今日子供たちが集めたものを紙がシートの上に並べてその種類 数 法則性を知らせる場面をつくらなかったか反省の余地がある。わからないところは帰って図鑑などで調べようねと方向づける。 木立の中はターザンロープやいろいろ子供たちの人気スポットであるがロープの長さの違うものをさげておけばその周期まで発展するだろうし教師の環境設定、教師の援助にも工夫の余地がある。

4 . 反省と今後の対策

草の根のところでは前回のことを覚えていて前回説明したと同じ草を持ってきて見せにくるなどは子供の発達の良い例である。

教師が自分の言っていることにいちいち聞いてくれるから注意を引こうとして次々に新しいものを発見して来る .教師はそこをうまく乗せて自分の教えたいことに成功し

ている。子供も教師も発達してくる。木の根は真っ直ぐ下に向かって伸びていくものもあれば芝生のように一節ずつ横に伸びるものもある。これが将来の生物学につながるのだと意識したい。

指導事例2 カブト虫の幼虫探し

1 本日のねらいと内容

ねらい

自然を満喫し。四季の事情を知ると共にかぶと虫の幼虫を探し出して観察したり飼育箱で羽化までの観察する。

内容

年間の作業工程に基づいてしいたけのほだ木集めから腐葉土集めにより床作りし産卵させている自然の中に設置した養殖枠を取り外しどんなになっているか観察すると共に園に持ち帰り観察箱により羽化までの様子を観察しようとするもの。

本日の指導に当たって

環境構成

研修場の物置からペンチ、スパナ、くわ、ホウキ、スコップ、シートを。取り出す

日案 木津 新富 平畝 2005.7

8:30	登園	
生活の流れ	友達や、先生と朝の挨拶をする。 持ち物の整理と、シール貼り	
時 間	予想される幼児の姿	環境構成 と 教師の援助
9:30	園庭集合	用便を済ませて集合
9:35	人数確認	呼ばれたら「はい」と返事をする。
9:40	園バス出発	ビニール袋 かご 網 を用意
9:45	到着	鍬、スコップは研修場の物置小屋から出し用意する。
9:50	作業取り掛かり 養殖枠取り外し 「養殖枠にはしいたけの後の腐ったほだ木や腐葉土」	6つの枠から1つの枠を解体する。 重たい木は新富、平畝で教師が取り除く土や腐葉土の掘り返しは子供に任せて発見させる
10:40	幼虫発見おわり	

11:00	発見物をまとめる 後始末	発見物の講評 わからないものは図鑑で調べる 全員でおかたづけをする。
11:10	人数確認呼ばれたらハイと返事をする	人数確認と忘れ物のチェックをする。 お手洗い、うがいの励行
11:15	帰園	
11:30	昼食の準備	

2. 授業の記録

今日は楽しいカブト虫を取りに行く日であるかぶとの観察用に1年がかりで飼育した枠を取り外してみる事になった。次々と転がりてくることを期待してみんな男先生の鍬のしたを見守っていたが全然でない。あちこちから「おらん」という声があるもう20分近く子供たちが注視している期待に添えようと懸命に掘ったがとうとう駄目だった。

3. 考察

保育者は内心あせりにあせった早く見つけ出して子供の歓声を聞きたかったのである我慢しきれない子は先生と一緒に掘り出した。子供たちはすばやくいないことに気づいたのでもうそれはどうでも良いそれよりも出てくるものすべてが興味深いのである。先生はカブト虫しか目が向いていないので子供たちが「こんなところにどングりがある」今どきドングリのシーズンでもないのに土の中から出てくるなんて不思議という四季の事象に気づかせるタイミングを保育者は失っている。「変な虫みつけたね」とか「いいもの見つけたね」という余裕がない。この間に子供の声が沢山出ているのに全部留守になってしまった。子供たちは自然に対し無限の探究心を持っている。



4. 反省と今後の対策

一連の野外活動の実践を通して教材面でいろいろなことを学んだ。これを今後の教育

課程、指導計画に反映させていきたい。

集めたもの収穫物は必ずシートに並べておき性質の違いを発見したり種類、数、量、法則性、長さなど意識して学ぼう。

各学年、発達に応じて感じることであるが特に年少などは、自然界の不思議のいろいろを発見するだけでよい。教師が意図して教え込もうとする時の声と自分で発見した時の声の大きさを高さを聞けばはっきりとわかる。

年長など年齢が上がるに従って「何を食べているのかな？」とか「どんなところが住みやすいのかな？」まで発展していく。

まとめ

「自然から学ぶ」、「科学する心」を教育方針として位置づけている。四季折々の事象からいろいろのことを学び取ろうという姿勢である。塩田跡地に建設した現在地は毎年の台風被害が大きく、幼児教育に適さない環境と判断し、別の自然に恵まれた山、海、野原の場所に野外活動の場を設置した。幼稚園には学習指導要領はなくそれに代わる幼稚園教育要領で教育課程、指導計画により健康、人間関係、環境、言葉、表現の五領域を目標に保育を進めている。今回の研究テーマである、幼児が環境の中で、友達と関わり、好奇心や、探究心を抱き物事の法則性に気づいたり文字や数量に対する感性磨き幼児期にふさわしい知的発達を促すための教育課程の位置づけをどのように遂行したかその一端の事例である。草の根では、子供自ら発見させる、一人一人を受け止めてやる、うまく乗せてやることで**喜びを深める援助者**となり「君の腕の長さと同じだね」とものと比べて長さをおしえることは**思考を喚起するもの**、「こっちを向いて聞きなさい」と強制するより子供に合わせて共鳴したほうが**幼児の共同作業者**、として「わからないところは図鑑で調べてみよう」とか「これを使って何か作ろう」など集めたものの説明は**次回への期待と思考を喚起するもの**、またカブトムシの幼虫探しでは「おや？なんだろう」と次々出てくるものに疑問を持つことは**科学する心**一人一人の発達に応じた問題の与え方の大切さと沢山なことを習得した。

Abstract:

Providing the appropriate education during infancy is necessary as it is the period when one learns of the things around him and builds his own distinct character. As the infant gradually matures, he develops a personal relationship with the immediate surroundings that contributes to his learning progress characterized by growing curiosity and inquiry along with refinement of his character. It is in this ground, therefore, that the suitable infant education for intellectual development is researched on.